

朝日 歌壇 俳壇



「日曜日のプロローグ 08」 junaida

●川野里子選

こんなにも骨の浮き出る身体して笑うこと見ゆガザの
 どりこ (観音寺市) 篠原 俊則
 友達や家族とけんかしたときのぼくは素数になった気分
 だ (奈良市) 山添 聡介
 バンザイの姿に干されたトレーナー 完走したなニマ
 ラン (船橋市) 藤本 典裕
 ふるさとを離れることを受け入れた日の目で父がはく紙
 パンツ (和泉市) 星田 美紀
 他人へと渡りし食堂 非常口に巣づくりはじむ燕は今年
 も (市川市) 山崎 蓉子
 ゴミ袋出しましたかと古い妻の寝言が破る真夜のしじま
 を (横浜市) 丸岡 良雄
 妻の部屋ノックもせずに開けてみる逝き去った月姿の見
 えす (秦野市) 八木 実
 少しだけ開いたリュックの隙間からレジャーシートが羽
 化する五月 (東京都) 音羽 凜
 わが庭にのそりと顔出す猫はみな旅の途中という顔をする
 る (福岡県) 末松 博明
 徘徊の母は窓から抜け出して探しぬ十五で逝った弟
 (西東京市) 佐々木 節子
 大用水路と大排水路時に寄り時に離れて穀倉を行く
 (水戸市) 檜山佳与子

やわらかき田に印された十字架のひとつひとつに苗を植
 えゆく (佐渡市) 藍原 秋子

【評】一首目、飢餓状態にあるガザ。それでも嬰兒は笑お
 うとする。報道画像から独自なものを見取った。二首目、
 素数は孤独だ。四首目、老いを受け入れる目だ。六首目、
 妻の存在感に圧倒的。十二首目、苗の一つ一つが祈りだ。

●佐佐木幸編選

この村の風が好きだといふやうに何度も巡る初燕なり
 節を茹でる時のみ出番あり賑やかなり頃の大鍋 (厚木市) 北村 純一
 ☆シロエビやホタルイカというキーワード跳ねる人混み連
 休の駅 (松山市) 矢野 精代
 岬へと潮に抗して漕ぐわかれのカヌーを抜き去るトビウオ
 の群れ (富山市) 松田 梨子
 春天の左近川には青赤のカヌーすみてばらのはねをり
 (京都市) 中川 大
 残雪の中央アルプス振り返り無人駅から小海線に乗る
 (東京都) 松崎 哲夫
 母の日に何欲しいかと問いたればあなた母じゃないと
 妻いう (東京都) 尾関 友詩
 (相模原市) 本田 達也

うたをよむ 小倉蒼蛙の俳句

俳壇で俳人の小倉蒼蛙さんが第4
 句集「優しさの手紙」(書肆アルス)を
 出した。旧芸名は小倉一郎。多くの映画
 やテレビドラマに出演し、最近ではNH
 K朝ドラ「あなはん」での演技が好評
 だ。俳人としては2023年に俳句結社
 「あおがえる」創刊主宰になっている。
 句集名になった句には「山田太一さん
 サヨウナラ」の前書きがある。山田さん
 が亡くなったのは23年11月。
 優しさの手紙を今も冬あたたか

蒼蛙さんが若き日に病で倒れたとき、
 山田さんからこんな手紙をもらって
 いた。「ぼくには絶対に必要な俳句さん
 だ」「早くなくていいですから、本当に
 体力をつけて下さい」
 この句を含めて、句集には「追悼句」
 がいくつも収められている。丹波哲郎さ
 んに「霊界に色無き風は吹きますか」。
 原田芳雄さんに「蛍死す電池交換出来る
 なら」。市原悦子さんに「よく通るまた
 ねの声や冬の雲」。
 (俳壇担当) 西秀治

◆「永田和宏選」は選者が海外出張のため休みます。

第3回稲畑汀子賞。日本伝統俳句協会の主
 催。高知市の稲畑憲明さん(92)の「橋田憲明
 句集」(文学の森)と神戸市の三村純也さん
 (72)の「高天」(朝出版)に決まった。
 岸本尚毅著「露月百句」 正岡子規が高く
 評価し、秋田県の近代俳句を先導した露月の
 句を読み解く。(秋田魁新報社・1540円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録
 し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発
 表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があ
 ります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横
 に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661
 晴海郵便局私書箱300。短歌は「朝日歌壇」、
 俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき
 ます(週に2作品まで)。QRコードから

「加藤さん、帰れそつ。」って聞いてくれた先輩のような
 先輩になろう (大阪市) 加藤 成和
 パソコンの電源静かに落とす昼保育園の子また熱出して
 (ひたちなか市) 安澤 美幸

ミサイルが飛び交う空に月は浮くキーウの早朝ガザの真
 夜中 (神戸市) 益田 信行
 目も合ぬ店員よりも騒やかな音楽奏で来るロボウレ
 (東京都) 井上 智景
 三波春夫の歌どこからも聴こえない大阪万博すこし寂し
 い (甲府市) 村田 一広

●高野公彦選

【評】第一首、燕が飛来する季節。「初燕」という季節をう
 まく使って、動きのある一首に仕上げた。第二首、子供た
 ちもいて家族が多かった時代は毎日使った大鍋である。第
 三首、富山の春のシンボルシロエビとホタルイカである。
 今もまだ戦後と言おう伊江島に二十人分の遺骨見つかる
 (本巣市) 青木 鈴子
 布引の滝への道にならぶ歌碑異国の人が接写しており
 (神戸市) 松本 淳一
 ☆シロエビやホタルイカというキーワード跳ねる人混み連
 休の駅 (富山市) 松田 梨子

銃、兵士、戦車を描く片隅に青と黄の旗添える子供ら
 (中津市) 瀬口 美子
 ドローンの無数に飛び交う戦場を思いつつ見よく遊覧の
 (魚沼市) 磯部 剛

本当のふるさととはどこ外交に使われているとはパンダは知
 らず (岩出市) 明治ひつみ
 動物と親しみて来しわが祖ら鵜飼、鳥飼、猪飼、大飼
 (東京都) 上田 国博
 妻の味食べる力を引き出して克服できた嚙下障害
 (東京都) 松本 秀男

窓小さく大きな箱の形した家が増えゆく地震の国に
 (茨木市) 瀬川 幸子
 街灯がLEDに置き換わり夜交の月がアナログに見ゆ
 (富田林市) 芝田 敦
 小血にて分けていたたく独活、蔵、野蒜、五加や 春は
 (長野県) 千葉 俊彦
 瀬戸内のいりこだし香るラーメンをおいしくいたたく仙
 台にいて (仙台市) 小室 寿子

【評】1首目、沖繩本島の西に浮かぶ伊江島は、沖縄戦の
 激戦地だった。そこになお残る悲劇。2首目、神戸市にあ
 る歌枕・布引の滝を詠んだ和歌は多数あつて、歌碑にもな
 っている。3首目、富山湾の名産に集まる旅行者たち。